

研究だより

弘西資源開発第一次予備調査 に参加して

(青森県西南部奥地林の概況)

青森支場 井 沼 正 之
細 井 幸 兵 衛

イ. 概 況

青森県の中でも最も開発が遅れているといわれる西南山岳地帯は、われわれもかねてから興味をもつていたところである。しかしながらこの地域は既に土壌調査、地質調査あるいは施業案の検定などの調査のホコが進められ、一部ではあるがかつて村井支場長が植生調査をなされたところでもある。

先ず地況を眺めてみよう。川原平部落から海拔400mの暗門ノ滝まで約12km、さらに郡界まで約4km、暗門ノ滝より先は路がないので沢を遡行する。郡界は約600m、下つて赤石川は海拔250m余。此処には赤石ダムがあり、これから先には工事用の通路が通じている。分水嶺まで急峻な斜面が続く800m。これから又下つて追良瀬川に至る300m追良瀬ダムがある。上つて笹内川との分水嶺、一ツ森と小箱山との鞍部を越える嶺線も800mを下らない、これから笹内川200mの高さに下る暗門ノ滝からその間は地形図幅上での直線距離でわずか12kmに満たない、推してその斜度のけわしさは想像されよう。

さてこの地帯の土壌型は全般的に P_{bII} (弱乾性ポドゾール) といわれ奥地林なる不便も手伝つて目下のところ樹種更改の対象にもされていない。また今回の地下資源および地質調査の報告ではコースの大半が中新世の田ノ沢統に属し、わづかに蒲ノ沢統が現われているという。しかし火成岩類の発達はいずれも貧弱で暗門ノ滝附近の安山岩および追良瀬川の安山岩類が稍顕著で、その他は処々に小規模な岩脈が観察されるに過ぎないと述べている。ところでこの中直接森林と密接な関係にあるのは郡界から赤石川までに広く分布している頁岩地帯である。詳細は後述するが風倒及

び崩壊の原因をなしているのである。

次に林況について述べてみよう。

ロ. 林 況

踏査の範囲を林況の相違から次の4つに分けて説明する。

1. 川原平——暗門滝
2. 暗門滝——郡界
3. 郡界——赤石、追良瀬川分水嶺
4. 赤石、追良瀬川分水嶺——笹内川上流

これらは総てブナが主体の林分で沢沿いにわずかにサワグルミ、トチ、カツラ、ミヅナラなどを混じておりその成立過程、地況等によつてそれぞれ幾分異つた林況を呈している。

1. 川原平——暗門滝

川原平部落を起点として暗門滝に至る岩木川及びその支流の暗門川流域はともにその兩岸の地形は一般に急峻であるが、それに反して河床は概して緩かで木材の管流に適していると思われる。本地域の樹種の大部分はブナで河床近くにはミヅナラ、ホホ、ドロノキ(稀)、トチその他の広葉樹が少なく総体的にみて成育良好とはいいがたいようである。終戦前後の異状伐採により搬出に便利な利用の対象となる林分は岩木川、暗門川(滝まで)兩岸では急峻な一部を除き殆んど皆伐され今は再びブナを主とした稚幼林に変わりつつあるが又処々には地表が剝脱して母岩の露出せる個所も見受けられる。したがって治山治水の面を勘案した場合、今後岩木川上流、暗門川の森林資源の開発はそれ程期待できない。かかる見方からすればこの地帯の森林資源の開発は搬出路の拡充による奥地未利用林分に期待しなければならないであろう。参考迄に説明書、調査簿から我々の見た範囲の蓄積を記してみる。

ブナ	50,432m ³	ミヅナラ	11,425m ³
イタヤ	4,952m ³	アカマツ	232m ³
スギ	638m ³	計	67,678m ³

2. 暗門滝——郡界

地形は一般に急峻とはいえないが各所に小面積の崩壊地跡が点在している。幸なことにその大部分は現在灌木草本類に被われており、更にその一部はブナの幼令林となつている処もある。(註、伝え聞くとによれば以前伐採も行われたという) 今後の森林の取扱い如何によつては充分復旧するものと考えられる。本流域はブナを主とし沢沿にトチーサワグルミ群落が若干広く認められ峰通りの岩石地にヒメコマツが見られる。成育は一様でなく概して沢沿いは良好で中径級のブナ林が

多く所々ブナ、トチ、カツラの大径木が点在している。全般的には皆伐或いは択伐跡地と思われるような林相を呈している所が多く疎林分で形質は良好と思われない。

蓄積：ブナ24,438m³ ミヅナラ1,348m³
イタヤ1,660m³ 計 27,446m³

3. 郡界——赤石、追良瀬川分水嶺

海拔550mの中一西津軽郡界から850mの赤石、追良瀬川分水嶺に至る間は今回のコース中もつとも良好な林相を呈していたところである。特に郡界から赤石川と櫛石沢の合流点に至る西向斜面の下部は湿潤でサワグルミ、ミヅナラ、トチなどの樹種に富み地床にはリョウメンシダ、ランダ、ミヤマベニシダ等の群落が発達している。その上部はブナの密林に連続し全般的に直径40~60cm 樹高23~27mに及び各樹種とも形質は甚だ良好である。部分的にはha 200~300m²のブナ林分も珍しくなく郡界から赤石、追良瀬川分水嶺間のコース周辺の蓄積の概量は約380,000m³であるが、この内の280,000m³はこの地帯周辺の蓄積によつて占められている。赤石川を渡つて分水嶺までの間は今回のコース中もつとも急峻であつた従つてこの斜面は随所に小面積の崩壊地が点在している。又一見皆伐跡地と思われるようなところが所々にみられるが、これも既往の崩壊跡地であつて現在灌木草本類に被われているところである。林相はブナが主体でミヅナラその他の広葉樹も点状に混じり大径木が多く概して疎林分であるが形質は良好である。ところで赤石川の西向斜面、東向斜面ともに風倒木の多いのが目につく特に西向斜面に多く15号台風の被害だといわれており相当面積にわたつて未利用のまま散在し、その転倒跡地は地表剥脱し母岩が露出しており地形の急峻と相俟つて崩壊の危険性が多分にあり今後の治山対策が望まれる。

この地域の風倒木及び崩壊の原因を考えるに西向と東向斜面とでは全く異つた母岩からなりたつてゐることである。前者は上部が幾分急峻だが全般に比較的緩い斜面である。然し母岩が頁岩なため表層とともに流失している上、頁岩の性質として細かく破壊してゆくのでブナの浅根性と相俟つて多くの風倒木を出す原因となつたものである。これに対して後者の母岩は緑色凝灰岩で安定はしているが急峻(35~40°)なために浅い表層土が地すべりによつて崩壊したもののように観察された。

蓄積：ブナ347,186m³ その他16,000m³
計363,186m³

4. 赤石、追良瀬川分水嶺—笹内川上流、

追良瀬、笹内両流域ともに中腹以上は急峻で表層土浅く所々に地表剥落して母岩の露出している箇所が少くない。特に笹内川上流の1,000m以上の連山の急斜面に多く治山の面を考慮した場合この地帯の開発は相当の制約を受けるだろう。しかし追良瀬川上流から一ツ森に至る間は緩斜地が多くこの地帯の森林は開発の対象になり得る。樹種はブナを主としミヅナラ、トチ、サワグルミ、イタヤ等が部分的に混入している。大半は老令大径木の疎林分であつて形質の悪いものが多い。成育状態は一般的には良好であるが中腹及び赤石、追良瀬分水嶺の峰通り風衝地は林下にネマガリタケの発生多く成育も又不良で峰通りのブナは直径20~25cm 樹高12m前後である。沢沿いはサワグルミ、トチ、カツラが良好な成育をなしている。トチは老令大径木で形質成長ともに不良のものが多く一見過去に於て不用樹種として伐り残されたもののように見受けられる。

蓄積：ブナ237,403m³ ミヅナラ27,324m³
イタヤ22,014m³ サワグルミ15,805m³
トチ5,453m³ カツラ3,864m³
その他8,220m³ 計320,083m³

ハ. 樹種更改についての考察

本地域について樹種更改を問題とするならば林況、地形、植生の面から次の如く判断される。

スギの適地—暗門ノ滝上流にはサワグルミ—トチ—カツラ群落が発達しており凹地は表層土も厚くスギに改植し得るところが部分的にかなり多く存在している。又赤石川流域の櫛石沢、下部合流地附近から沢沿いに相当広くサワグルミ—トチ—カツラ群落が発達し下草としてリョウメンシダ、ランダ、ミヤマベニシダなどのシダ類が優勢に生育している。地形も平坦地或いは緩斜地で今回の踏査コース周辺の外況調査だけではその適地の範囲を知ることが出来なかつたが地形図から判断するとその面積約100haと推定される。その外この地帯より下流の津軽沢流域も又かかる適地が相当広く存在しているといわれている。

追良瀬川流域から笹内川に至るコース周辺(中腹)の大半がダム工事の鉄索道を作るため附近の樹木が伐られていたので以前の林相は推定の他はないが地形は階段状をなし各々の台地は湿潤でスギに改植した場合相当な成長が期待されよう。然しこれが実行の段階に於いては積雪その他の環境の調査を十分な必要があるのは勿論のことである。

カラマツの適地—ブナ林地帯に於けるカラマ

ツ植栽は相当の海拔高まで可能とされている。踏査コースの最高は赤石、追良瀬川分水嶺の800mであつたから垂直的にみた場合カラマツの植栽は可能であるが前述のように地形が急峻で表土も浅く伐採、即、崩壊の危険性をともなつたところが多いのでスギ適地のように大面積にまとまつたところはない。然し小面積ではあるが部分的には適地と思われる林地も少くない。例えば暗門滝上流、櫛石沢中流緩斜地、追良瀬川上流から一ツ森に至る間の台地及び緩斜地等から、その適地を選び出すことは至難の業とは思われない。附近のブナの成長から見ても充分カラマツの成長も期待されるものと思われる。尚赤石川、追良瀬川間の地帯は急斜地及び乾燥地が多く従つて湿潤地を除いては樹種更改の対象外であらう。

またアカマツについて観察したところによれば暗門沢流域の海拔300mに於て成育、中以下ではあるがアカマツを期待し得るようであるから此の地帯の適潤地及び乾燥地にはアカマツの植栽も可能のように思われる。但しこれが実行の段階には充分環境調査の必要があらう。

ニ. 総 括

踏査コース周辺の林況及び将来の樹種更改適地についてその概況を述べてきたが日程の関係もあつて十分に精査はできなかつた。従つて此の報告はコース周辺の林況だけについて述べたもので此の地帯全般についていい得るかどうかは今後の実態調査にまたなければならぬ。今回の踏査コースを中心とした森林蓄積の概量は約730,000m³その内ブナは90%であるが一般に地形が急峻であるため随所に崩壊地を生じている、このような点から考えれば今後この地帯の開発が進んだ場合といひとも治山を考慮した場合は当然相当な制約を受

けるだろう。また将来この地帯が開発された場合を考慮し少くともブナより利用価値の高いスギ、カラマツの植栽適地の概況調査をなしたが急峻地を除くコース周辺に多くの適地と思われる箇所が認められた。

附 記

津軽奥地の開発は国有林、地方住民にとつても久しきにわたる待望の課題であつた。

われわれは9月3日より7日までの5日間、十和田、岩木川地区総合開発協議会の発意に依つて行われた弘前、西海岸(岩崎村)間の資源調査に農林資源調査班として参加する機会に恵まれた。

この調査に参加した人数は49名弘前、深浦、岩崎、西目屋各市町村議員及び弘前、秋田大学、青森県庁、林業試験場が主体であつた。

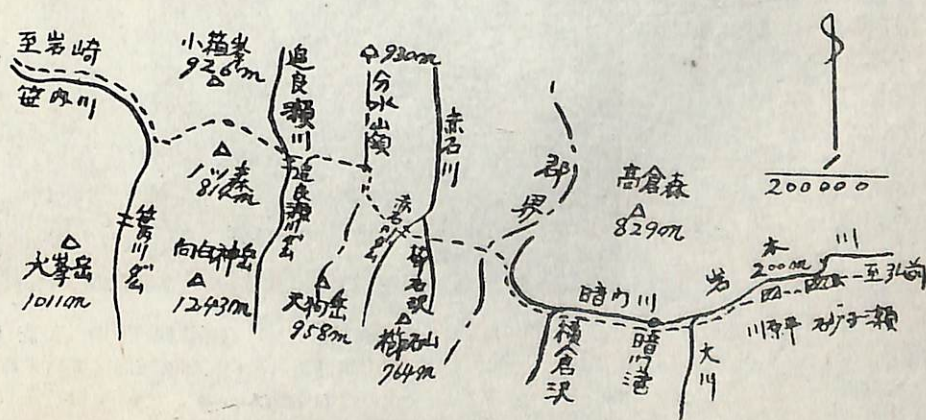
資源の調査にあつて各専門の立場から調査をなしたものである。

以下森林資源調査を除く各調査班の報告の概要を述べることにする。

道路調査—西目屋村川原平部落より岩崎村間の踏査コースの距離は約52kmであるが、この地域は前述のように急峻な地形をなしているので道路も大きく紆余曲折しその延長82kmとなつてゐる。踏査コースを中心とした道路工事費は約12億円の巨額を要するが、これが開ざくの暁にはこの巨額に勝るこの地域の資源が答えてくれるであらう。

地下資源調査—踏査コースに分布する地層の大半が田ノ沢統で鉄床の最も有望な母岩をなすものである。青森県の既知の総ての金属及び石炭鉄床はこの地層に胚胎されている。したがつて本層が主体を占めている、今回のコース途上には顕著な鉄床、露頭こそ認められなかつたが鉄床発見の可能性はきわめて大で今後の精査の必要性が要望され

踏 査 コ ー ス

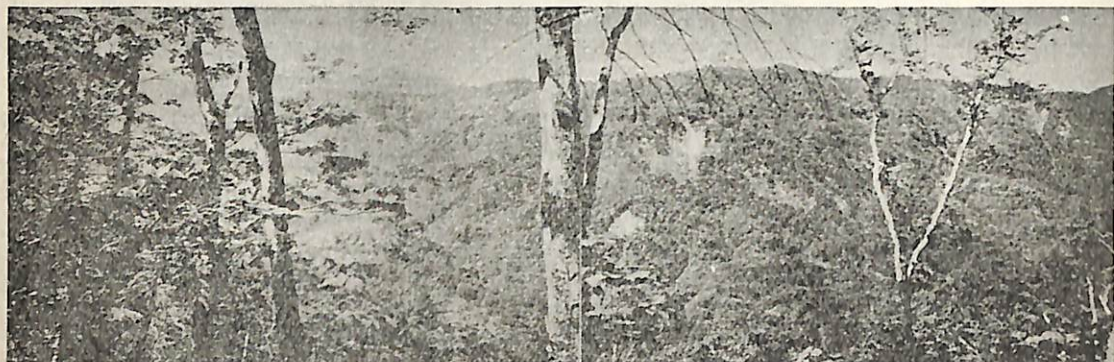


る。又笹内川中流上部に石炭夾炭層(30cm)の露頭がみられるが、その広さおよび層が幾重になっているかは今後の調査に期待したい。

総合資源調査—農林資源のうちこの地域における耕種農業を前提とした開拓の可能性は薄い、しかし畜産振興と関連させた場合は注目される地域となろう。

つぎにこの地域の道路開さくを前提としての観光資源は極めて有望視される。

目屋溪、暗門滝を経て高所からブナ原生林を眺望しながら赤石、追良瀬ダムを探訪し更に笹内川の溪流を眺め一ツ森、奥の湯に身を休め十二湖、深浦、大戸瀬海岸に至る風光はそのスケールにおいても国立公園の価値があると思う。

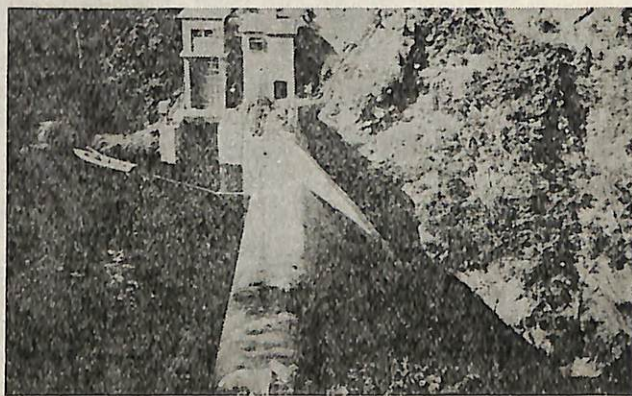


(1) 西、中津軽郡界より赤石川東向斜面を望む。
対岸斜面の母岩は緑色凝灰岩であるが地形急峻のため、随所に表層土流失の跡がみられる。



(2) 赤石川西向斜面のブナ密林
この地帯の母岩は風化の進まぬ頁岩であるため莫大な風倒木(15号台風)を出している。

(3) 赤石川ダム 建物の下が追良瀬、笹内川ダムを通り大池発電所に至る隧道水口。



農林省林業試験場青森支場
青森市沖館 青森営林局構内(電話青森6876番)

編集発行人 神 キヨシ